

CASE#2

三度の挫折を乗り越えて 小さな勉強会から地域のDX化を目指す



実践者

東川信一

居宅介護支援事業所 主任介護支援専門員、
ならケアマネ支援ネット 代表

「ならケアマネ支援ネット」について

私が代表を務める「ならケアマネ支援ネット」は、2017（平成29）年5月に始まった勉強会グループです。当時、主任介護支援専門員を取得したばかりの私が、継続的に学べる場を求めて9人の仲間とともにスタートしました。

現在は、私が主に講師を務める「ICT勉強会」と「アローチャート勉強会」の二本柱で、毎月オンライン形式またはハイブリッド形式で勉強会を続けています。2024（令和6）年で7年目を迎え、この間に三度の大きな挫折を経験しました。

始まりのきっかけ

「ならケアマネ支援ネット」を始めたきっかけは、主任介護支援専門員研修で仲よかったケアマネジャーと共有した1冊の本、足立里江著『主任ケアマネジャーのための朝来式 ケアマネジメント支援サクセスガイド——支え、育てる「地域ケア会議の極意」』（メディカ出版、2017年）でした。地域全体での取り組みが具体的に書かれており、足立さんや朝来市の取り組みを参考に、月1回の勉強会を開始しました。

当初は奈良県中南和地域の主任介護支援専門員9人が集まり、理論や倫理を学び合う小規模なスタートでした。講師も資金もなく、渡部律子氏の「気づきの事例検討会」を中心に3年計画を立てましたが、計画どおりには進みませんでした。

一度目の挫折

1年目の終盤、メンバーの半数が「基礎学習の繰り返しがいんどい」と退会。このままでは存続が危ぶまれました。そこで、対象を主任ケアマネジャーだけでなく学ぶ意欲のあるケアマネジャー全般に拡大し、カリキュラムを見直して再スタート。基礎学習に加え、多職種の講師を招いた「テーマ別勉強会」や「事例検討会」を取り入れ、奈良県初の「アローチャート研修」も開催。徐々に入会者が増えていきました。

二度目の挫折

さらなる発展を目指していた矢先、新型コロナウイルスの影響で活動が中止に。オンライン開催の声が上がり、Zoomでの再開を試みましたが、機械が苦手なメンバーも多かったため、「オンラインお茶会・飲み会」で慣れてもらい、月1回の勉強会を再開。しかし、参加者は30人から10人に減少しました。さらに、長年一緒に活動してきたケアマネジャーが退会し、企画は私一人で担うことになりました。オンラインではカリキュラムどおりに進まず、毎回メンバーの意見を聞いてテーマを決める形に。その時々のごりがテーマとなり、試行錯誤の連続でした。

三度目の挫折

2023（令和5）年5月、新型コロナウイルス感染症分類の変更を機に会場開催を再開しました。オンラインで入会した他県のメンバーもいたため、

ハイブリッド開催を選択。しかし、期待した元メンバーの復帰はなく、マンネリ化や参加者減少に直面しました。そこで「アローチャート研修」を再開しました。2023年の夏に開催し、その評判から2024（令和6）年3月には「アローチャート2.0研修」も実現しました。

「ICT勉強会」の立ち上げ

三度の挫折を経て、「他団体との差別化が必要」との結論に至り、「アローチャート勉強会」と「ICT勉強会」の二本柱で2024年4月から開始しました（毎月開催）。

コロナ禍でオンライン研修に参加していた私は、「オンラインPCスクール タダスク」を知り、無料で使えるツールの活用法を学びました。その便利さに感動し、地域のケアマネジャーにも共有しようと試みるも、「機械が苦手」と興味は薄い様子。そこで、「ならケアマネ支援ネット」でこの企画を取り入れることにしました。

2024年1月から3月にかけてオンラインで「ICT研修会」を開催。参加者は毎回8～10人で、講師はブレイクアウトルームで個別対応するなど丁寧な指導が好評でしたが、「進捗が早すぎる」「ログインできない」などの声も。そこで、4月から新たにICT勉強会をカリキュラムに加え、初心者にも寄り添った内容にしました。

ICT勉強会のこれまで

ICT勉強会では、これまでに「Googleの基本設定」や「パソコン操作の時短技」などをテーマに、毎月1回勉強会を行ってきました。開催方法はZoomがメインでしたが、「オンラインでは直に教えてもらえない」との声から、5月と8月はZoomと対面でのハイブリッド開催を実施。「全員取り残さない」をモットーに個別対応しましたが、オンライン参加者への対応が手薄になる課題が浮上。そこで、事業所への「出張型支援」も始めました。



「ICT勉強会」の様子

今後の展望

介護業界のDX化が進むなか、多くのケアマネジャーはアナログから脱却できていません。業務の複雑さや日々の多忙さから、新しいことに取り組む余裕がないのが現状です。「ならケアマネ支援ネット」では、一人ひとりの「できない」に向き合い、「できるまでサポートする」ことを大切にしています。しかし、参加人数が増えたときの対応、事業所や地域の理解不足といった課題もあります。それぞれの課題をいかに解決し、ICT化を推し進めていくか、模索は続きます。

国は、ICT活用によるケアマネジメントの質向上と業務効率化を期待しています。私たちの取り組みにより、現場の負担が軽減されることは明らかで、DX化は避けて通れません。一人でも多くのケアマネジャーが賛同し、ICTを駆使して業務を行うのが標準となる環境が整うことを切に願っています。

Check Point!

- ☑『『できない』を『できる』に変えるにはどうしたらよいか』を考えてみる
- ☑オンラインと対面を組み合わせるなど、最適な方法を柔軟に考える
- ☑ICTの必要性やメリットを地域や事業所に啓蒙することの意義を理解する